

本附属学校園の幼小中一貫教育の成果に向けて

本附属学校園は、本格的に幼小中一貫教育に力を注ぐ中で、運営組織を充実させるとともに、幼小中が系統的で継続的な児童・生徒への指導を行えるように様々な工夫を行ってきた。また、研究主題を定めるとともに、各年度ごとに副題を設定し研究実績を積み上げて本日に至っている。研究期間の最終年度を来年度に控える中、今年度の研究会では保育・教科等を中心に、これまでの教育・研究の視点や実践してきた結果が研究授業の中で表現できるようにと努めている。冒頭にあたり、これまでの研究の流れを概観するとともに、研究期間の最終年度である来年度に向けた成果について、研究担当の附属学校園の大学主事としての立場から展望する。

本附属学校園が本格的に幼小中一貫教育に力を注ぎ始めたのは、島根大学が法人化に向けての準備をはじめた平成15年度のことであった。背景には、全国の国立大学における教育・研究の計画的な運営の必要性、特徴性、およびコスト意識が社会的に要求されてきたことがあげられる。また、本附属学校園の位置する島根県松江市は、県庁所在地であると同時に自然豊かな立地条件を有し、島根大学松江キャンパスとも近いことから、地域との社会的・自然的な関わりを活かし、本附属学校園と大学とが教育・研究連携を積極的に進めてきた実績がある。特に、島根大学教育学部と教育学部附属学校園が、歩いて移動できる近い距離にあることは、一貫教育を進める上で大学と附属学校園で組織する運営体制や、附属学校園での大学生や大学院生の教育実習の面で大きな利点であったと振り返る。また、この利点に甘んじることなく、様々な教育・研究に関わる取組を全ての教員が、その立場を越えて、またいかして「かかわり合いをもった」ことが一番の強調すべき点だと考えている。言うまでもないことではあるが、研究当初からみると9年もの歳月が経過したことになるが、多くの実績や成果は、大学を含めてこれまで附属学校園の教育に携わってきた教員によって築かれ、また議論や修正を重ね・受け継がれてきたものである。ここに、これまで本附属学校園の幼小中一貫教育に関わった、また関わっている全ての関係者に感謝の意を表したい。

さて、平成15年度当時の研究の初期段階の頃を振り返ると、社会的な背景として幼小中の接続期における様々な教育課題が問題視されるようになっていた。本附属学校園においても、どのような子どもを育てるかについて、幼小中の連続した教育・学びの中で様々な取組・活動を考え実行していくことが重要であるという認識に至った。つまり幼小中一貫教育を通して附属学校園としての育てたい子どもの姿が明確になってきた。本附属学校園が目指す幼小中一貫教育を通して育てたい子どもの姿については、昨年度の本研究紀要の冒頭でも述べたが、再度確認しておきたい。つまり、平成18年に基本的な方向性を報告書『島根大学教育学部附属学校園一貫教育のあり方について（平成18年9月島根大学教育学部改組計画WG）』として明確化したことから始まる。また、その中で、今につながる基本理念としての「幼稚園・小学校・中学校の共同による一貫した教育によって、次代を創造していく優れた人材を育成する」が示された。この基本理念でいう「次代を創造していく優れた人材」とは、「子どもたちの一人一人が、自ら考え行動していくことのできる自立した個人として、心豊かにたくましく生き抜いていく」という願いや姿を込めている。そのために、幼稚園、小学校、中学校がともに力を合わせて一体となった教育を行うことを宣言したものであり、学部や家庭との連携を重要視しているのである。今年度は、それらを総括し「グランドデザイン」として、附属学校園内外に示すことができたことが大きい。大学教員も含めて、異動の多い附属学校園の教育現場において全

ての関係者が、附属学校園で培ってきた一貫教育の「運営体制」「系統的・継続的な指導」「特色ある教育活動の推進」について確認し、自らの活動に還元できるように整理ができたと言える。このことは、来年度の最終年度に向けた成果の一つといえる。

もう少し具体的に育てたい子どもの姿をみてみたい。本附属学校園では、幼小中一貫教育を三つのブロックに分けている。つまり子どもの発達段階のブロック化の中で育てたい力をさらに絞り込んで研究を進めているが、三つの教育研究ブロックは初等部前期（年少・年長・小1・小2）、初等部後期（小3・小4・小5）、中等部（小6・中1・中2・中3）を設定している。なぜ、この4・3・4の教育研究ブロックになるかについては様々な見方や意見もあると考える。教育政策上・財務上の観点からも多様なブロック化は可能であろう。しかし、私たちが取り組んでいるこの4・3・4の教育研究ブロックは、幼稚園と小学校、及び小学校と中学校の接続期が抱える社会的な問題、つまり小1プロブレムや中1ギャップと呼ばれる接続期を同じブロックとしてとらえているという特徴がある。つまり、社会的なこれらの問題に対して同一ブロックとしてとらえることで、その問題を見つめることであった。加えて、そもそも、それらの問題が存在するのかという視点も含めて、「プロブレム」や「ギャップ」として扱われている接続期を節目として大切にしたいと考えている。また、特に9歳や10歳という学力の定着や思春期を迎える小3、小4、小5という比較的難しい年代であるとされる学年を一つのブロックとしてまとめ、ギャップをなくすように努めていることも、本学校園の進める4・3・4の教育研究ブロックの強みであり成果の一つである。初等部前期ブロックでは、「自立への基礎づくり」を、初等部後期ブロックでは「集団の力を伸ばす」を、中等部では「自己実現を目指す」という目標を掲げ、また、「教育課程・研究」「子どもの絆」「教職員の協働」「子ども支援」のそれぞれの柱をたてて11年間を見通した子どもの育成をめざしている。以上のことをまとめたものが、本附属学校園一貫教育のグランドデザインであり、平成24年度の学校園要覧に新たに示すことができたものである。

さて、研究主題として「豊かな『社会生活』を創造する幼小中一貫教育の追究」として進めてきたが、完成期である平成25年度を見据えると、今年度はその効果や成果を具現化する大切な時期である。グランドデザインを示し整理ができたことが、大きな成果であるが、そのグランドデザインと照らして個々の教育や研究がどのように進んできたかを研究授業の中で参観いただければと考えている。研究では、その柱として八つの子どもの資質・能力の育成を考え、それらを通して今年度の研究主題である「豊かな『学び』をつくる子どもの育成～学びを拓く子どもの姿を求めて～」を設定した。この主題は、これまでの研究会では、教師側が子どもに求める様々な資質・能力をみるような視点であったものを、子ども自身が成長しているという姿・視点を大切に設定したものである。研究という観点では八つの資質・能力のうち、特に「思考力・判断力・表現力」に視点を当てて11年間のつながりを意識した教育を行っている。今年度は、子どもがこれまで附属学校園を中心に、家庭や地域で、学習や経験したことが、どのように学び合いの中で「いかされている」かについて参観していただきたい。それは、保育・教科等の中のみならず、子どもの成長の中で、長く広く、過去から現在に至るだけでなく、「いかす」ことが、子どもの将来にも繋がるようなものであってほしいと願っている。今年度の研究発表協議会の中の授業参観と実のある授業協議を通して、最終年度に繋げたい、いかしたいと考えている。（附属学校主事：島根大学教育学部初等教育開発講座、松本 一郎）